

日本語学習者の家庭訪問アクティビティーにおける日本人ホストの会話参加調整

——話題管理を中心に——

村 上 律 子

Adjustment of Conversational Participation among Japanese Hosts during Home Visit Activities by Japanese Learners: A Focus on their Management of Topics

MURAKAMI Ritsuko

In so-called “partner language contact situations” (Fan 1994, 2006), one (or more) of the participants is conscious of using his/her partner’s language, which is usually a native language. In this sense, it is obvious that Japanese families which volunteer to welcome Japanese learners for domestic visits take up not only the role of a “social host” but also a “language host” (ibid). This paper aims to analyze how Japanese hosts adjust their conversation for participation during a home visit performance activity by learners (being “language guest”) in the Japanese in Context course, with a focus on “introduction and expansion of topics” and “selection of topics”. The findings indicate that very often the Japanese hosts implement various “participation adjustments” in order to sustain the conversation and / or to encourage the language guests’ participation. It is clear that Japanese hosts tended to introduce topics by asking questions, with further adjustments either by expanding or changing the topic according to the guest students’ language ability and reaction. Japanese hosts also tried to distribute topics equally and to give each guest student equal opportunity to speak in the conversation. As also been widely reported in previous studies, common topics and topics which are likely to appear in contact situations were selected.

キーワード： 参加調整、言語ホスト、言語ゲスト、話題展開、話題選択

はじめに

他人の家庭を訪問する際、訪問される側とする側はホストとゲストという役割を担い、それぞれが役割にふさわしい言動をすることが期待される。本稿で取り上げる家庭訪問のアクティビティーは本来の社会的ホストとゲストの関係に加え、アクティビティーを成立させるために、日本語母語話者である日本人参加者と日本語プログラムに在籍している留学生参加者の間にいわゆる「言語ホスト (language host)」と「言語ゲスト (language guest)」(Fan 1994、ファン 2006) という関係も考察できると思われる。言語ホスト、または言語ゲストとして認識したそれぞれの参加者は、会話への参加の際に自分自身の参加を管理したり、相手の参加を管理したり、会話の進行を円滑に進めようとすると指摘されている (ファン 1998、Fan 2009)。

家庭訪問という接触場面で日本人参加者は留学生参加者を会話にスムーズに参加させるため、積極的に話題を導入して留学生参加者から情報を引き出したり、留学生参加者が話せるよう話題を選択したりするなどの調整を行い会話の進行を管理している。本稿ではこのような「話題」の管理に焦点を当て、「話題の導入・展開」と「話題の選択」に関して、社会的・言語的ホストとしての日本人参加者が会話を維持するためにどのような参加調整を行ったかを分析する。

1. 先行研究

1-1. 言語ホストとしての参加調整

Fan (1994)、ファン (2006) では異文化接触場面の参加者はそれぞれ接触言語に対する意識という視点から接触場面のタイポロジーを考察する。その中に、参加者のどちらか相手の言語を使う場合、その場面を「相手言語接触場面」と呼んでいる。このタイプの接触場面は参加者が自らの言語を使うことのできる「共通言語接触場面」と、第三者の言語に頼る「第三者言語接触場面」と区別する。また、ファンによると、従来「母語話者 (NS) — 非母語話者 (NNS)」とラベル化されるインターアクションは最も相手

日本語学習者の家庭訪問アクティビティーにおける日本人ホストの会話参加調整
言語接触場面になりやすく、参加者の間に「言語ホスト」と「言語ゲスト」という関係が成立しやすい。この関係を決定する要因は参加者の地位、性別、年齢、客観的な言語能力よりも、参加者の一方は「自分の言語を使っている」、参加者のもう一方は「相手の言語を使っている」という意識が働くかどうかによるものとされている。言い換えれば、相手言語接触場面の参加者は相手に対して自らの言語を使っている意識を持っているか、それとも相手の言語を使っている意識を持っているかによって、言語ホスト、または言語ゲストの役割が決定される。

言語ホストも言語ゲストも会話に参加するために「参加調整」を行う。言語ホストの参加調整は会話維持を目的とし、自分自身の会話参加のための調整を「自己参加の調整」、他の参加者の会話参加のための調整を「他者参加の調整」と呼びその調整行動を分類している。本稿では主に日本人参加者が留学生参加者の参加を促すための「他者参加の調整」について分析を行う。

1-2. 話題の導入・展開

中井（2002）では日本人参加者と留学生参加者の初対面会話において、話題展開のパターンを「質問一応答型」「相互話題導入型」に分類している。また中井・大場・土井（2004）は上記の話題展開パターンを踏まえ、談話レベルでの会話教育の指導項目として「情報提供話題開始型」「相互型の質問一応答型」「一方方向型の質問一応答型」の会話展開の型を提案している。本稿では上記の会話展開の型を参考に、「情報提供開始型」「質問一応答型」の2種類の話題展開パターンにより話題の導入・展開を分析する。

1-3. 話題の選択

話題内容の選択に関しては三牧（1999）が大学生の日本人参加者同士による初対面の会話で選択された話題を8つのカテゴリーに分けて分類した「初対面話題選択肢リスト」があり、日本人参加者同士の初対面会話でどんな話題が出るかを知る上で参考になる。

表1 初対面話題選択肢リスト(三牧1999より抜粋)

	話題カテゴリー	話題項目
1	大学生活	授業、サークル活動、キャンパス、バイト、試験・単位、休暇、遊び
2	所属	学部、学科、サークル、学年
3	居住	自宅／下宿、通学、現在居住地
4	共通点	共通の友人、共通体験
5	出身	出身地、出身校
6	専門	研究テーマ・卒論／修論、専攻
7	進路	就職、進学
8	受験	受験・塾

2. 分析方法

会話分析ではその分析の対象を大きく分けて「局所的な仕組み」と「全体構造」とに分類し、前者は話者交代や隣接ペア、先行発話などのミクロ的な現象を扱い、後者は会話そのものを総体として見、その構造を開始部・終了部、話題の連鎖などの現象から分析していくものである(ザトラウスキー 1993)。本研究の「話題」の分析については後者の「全体構造」をその対象とし、「話題の導入・展開」は各話題内における開始部と展開部の構造を分析し、「話題の選択」は話題内の意味的な結束性や話題の連鎖を分析する。

会話分析は会話データのみを分析対象とし参加者の内省データを用いないが、本稿では会話時の日本人参加者の意識を分析に加えるためフォローアップ・インタビュー(ネウストブニー・宮崎 2002)を実施し、日本人参加者の視点から会話の管理を分析する。インタビューデータの分析にあたっては、言語管理理論(ネウストブニー 1995、1997)に基づき次の5段階の管理プロセスに沿って日本人参加者の内省を探る。①規範からの逸脱、②逸脱の留意、③留意された逸脱の評価、④逸脱の調整計画、⑤調整の遂行。分析で得られた日本人参加者の調整行動から、日本人参加者の参

日本語学習者の家庭訪問アクティビティーにおける日本人ホストの会話参加調整加調整についての考察を行う。

3. 家庭訪問のアクティビティーの概要

3-1. 学習項目

留学生参加者はアクティビティーで効果的にインターアクションを行えるよう事前に以下の項目を学習する。

表2 トピック2「家庭訪問」の学習項目

社会文化能力	訪問のマナー（入室の際に靴を揃える／おみやげの習慣／辞去のタイミング）
社会言語能力	訪問の流れに沿って相手とのやりとり（訪問の約束の会話／インターホンでの呼びかけ／入室の挨拶／名乗り／おみやげを渡す際の表現／茶菓をいただく際の挨拶／嫌いなものが出たときの表現／辞去を告げる際の挨拶／辞去の挨拶） お礼の行動（お礼状の書き方／次回に会った時のお礼の表現）
言語能力	初対面の会話 ・自己紹介（出身／専門／趣味） ・日本での予定（～まで日本にいます／～に旅行するつもりです） ・日本語学習経験（アメリカで1学期日本語を勉強しました） ・将来の希望（大学を卒業した後で大学院に行くつもりです）

3-2. 留学生参加者の背景

家庭訪問に参加した留学生参加者3名はアメリカの大学に在籍し、IES 東京センターにより日本に1学期間滞在する短期留学生である。データ収集時の日本語力は、自己紹介や簡単な受け答えができる程度のレベルであった。

表3 留学生参加者の背景

	性別	専門	年齢	日本語学習歴	母語	趣味
F1	男性	経済学	20代	大学で1年間	英語	日本文学
F2	男性	広告学	20代	台湾で1ヶ月	英語、中国語	スポーツ
F3	女性	心理学	20代	大学で半年	英語	絵画

3-3. 日本人参加者の背景

家庭訪問先の夫婦 (J1、J2) は、アメリカに 5 年間駐在経験があり、留学生参加者の出身地やアメリカ文化などに造詣が深く、英語も堪能である。現在 J1 は退職後地域のボランティア日本語教室で教え、J2 はビジネスパーソンに日本語を教えている。

表 4 日本人参加者の背景

	性別	役割	年齢	出身
J1	男性	受け入れ先	60 代	東京
J2	女性	受け入れ先	50 代	名古屋
J3	女性	引率教員	40 代	長野

4. データ紹介

分析に用いたデータは家庭訪問の際に録音した会話と、受け入れ家庭のホストである日本人参加者 2 名に対して実施したフォローアップ・インタビューの 2 種類である。会話のデータはお宅に訪問して自己紹介が終り、皆がテーブルに着いた頃から IC レコーダーで録音を開始し、辞書の挨拶をしてお宅を出る頃に終了した。フォローアップ・インタビューのデータは訪問時の会話を聞くと同時に、文字化資料を見ながら実施した。

5. 分析の結果

5-1. 話題の導入・展開

5-1-1. 話題の導入・展開における談話構造

初級の留学生参加者と日本人参加者がインターアクションを行う際、日本人参加者は参加調整を行い、留学生参加者が会話に参加できるよう話題の導入や展開などの言語ホストの調整を行うことが多く見られる。この家庭訪問の会話では留学生参加者が対等に参加できる機会を得られるよう、自分から話題を導入したり、発話の少ない留学生参加者に話題を振ったり、留学生参加者から提出された話題を積極的に展開させたりするなどの

日本語学習者の家庭訪問アクティビティーにおける日本人ホストの会話参加調整調整行動を行い、初級レベルの留学生参加者を相手に常に会話をリードする傾向が見られた。

話題展開パターンを見ると日本人参加者が質問して話題を導入し、留学生参加者が答え、その情報を日本人参加者が展開していく「質問－応答型」の話題展開パターンが多かった。

また日本人参加者や留学生参加者が情報提供によって話題を導入することもあり、「情報提供話題開始型」の話題展開が見られた。日本人参加者の情報提供に対して、留学生参加者はあいづちや自らの情報提供によって話を展開するケースもあれば、何の反応も示さず沈黙するケースもあった。以上の話題展開パターンをまとめたものが次の表である。

表5 話題展開パターン（日本人参加者：J、留学生参加者：F）

	話題展開パターン	話題導入→話題展開／転換
1	J→F 質問－応答型	Jが質問→Fが回答→Jが質問／話題転換→話題展開
2	J→J 質問－応答型	Jが質問→Jが回答→Jが質問→話題展開
3	J→F 情報提供話題開始型	Jが情報提供→Fから反応有→話題展開、 または、 Jが情報提供→Fから反応無→Jが話題転換
4	F→J 情報提供話題開始型	Fが情報提供→Jが質問→話題展開

以下日本人参加者が話題を導入・展開する際にどのような管理を行ったかを見ていく。

5-1-2. 話題の導入・展開における言語管理

(1) 質問による話題展開と話題転換

日本人参加者が質問によって話題を導入するパターンでは、留学生参加者が答えたあと日本人参加者がさらに質問し話題が展開していくケースと、話題が続かず転換するケースがあった。次の例は話題が展開するケースである。

[話題 26 昼食]

J1: お昼御飯はどこで食べますか? いつもどこで食べますか? ←質問

F1: すきや? カルフル ←回答

J2: すきや、カルフルのすきや、あーありますね

J1: すきやって牛井? ←質問

F1: はい、牛井 ←回答

J2: 留学生の人たちはみんな牛井が好きですね、みんな好きですね

F1: サイゼリア? ←情報提供

J2: サイゼリア、イタリアン

(略)

この会話例では J1 の質問に対して F1 が答えたり情報提供したりすることで話題が展開しているが、次の例では話題が展開せず沈黙が続き、J1 が他の話題に転換している。

[話題 11 専門]

J2: F3 さんの専門は何ですか? ←質問

F3: Ah, しんり、がく ←回答

J1・J2: 心理学。

J2: ほー、すばらしい (拍手)

(5 秒)

J1: えー、F3 さんは、いつ、いつまで日本にいますか? ←話題転換

F3: Ah、9 月

話がどんどん難しくなっちゃうんじゃないかなあと。だから聞くべきこととはいろいろあるから、先に行っちゃたんだと思いますね。(J1)

F3 が「しんり、がく」と言ったあと J1 と J2 がそれを繰り返して、J2 が感想を言ったきり、F3 から J からも話題を展開させる発話がなく沈黙が続く。これについて J1 はコミュニケーション上の支障が生じるのを回避

日本語学習者の家庭訪問アクティビティーにおける日本人ホストの会話参加調整
するため話題転換したと述べている。

(2) 話題の振り分け

会話中 F1 と F2 の話題が続き F3 がしばらく発話していない場面で、F3
に対して J1 と J2 が質問を振っている。この調整行動について J1 は F3 が
日本語を話すことに自信がないため発話しないのだと判断して話題を振っ
たとコメントしている。

*(F3 に話題を振ったのは) 自然な流れじゃないですね。しゃべってない
ですもんね。いやな顔はしてなかったけど、ニコニコしていたけど、わ
かんないことがあると自信がないんですかね。(J1)*

このように日本人参加者は全ての留学生参加者に均等に話題を振り分け、
質問によって留学生参加者の情報を引き出し、留学生参加者を会話に参加
させていた。また日本人参加者は会話をしていく中で留学生参加者の日本
語力を判断し、その判断に基づいて展開が見込めそうな場合にはさらに質
問し、会話が維持できなさそうな場合には話題を転換するという調整を
行っている。

(3) 言い換え

会話中には日本人参加者だけで話す場面が出てくるが、留学生参加者が
会話に参加していないことに留意して、日本人参加者が話の一部を日本語
で言い換えたり、英語で言い換えたりする調整行動を取り、留学生参加者
の参加を促している。

[話題 33 日本人参加者の仕事]

J3: 今お仕事のほうは

←質問

J1: リタイアしました

←回答

J3: あーいいですね

J2: 今ボランティア日本語教室で先生です

←情報提供

(中略)

J3: そうですね、私も教えていました、ビジネスマンに ←情報提供

J2: そうですか、そうですか、大変ですね、仕事をしている人は、あの、勉強する時間がありません、留学生の人たちはたくさん勉強できるからいいですね、日本語をたくさん勉強してますね、今、勉強してますか？ Are you studying Japanese a lot now? ←言い換え

F2: うーん、まあまあ、yeah I study Japanese a lot, はい ←反応

私たちが日本語で話していて、多分キャッチできなかったと思ったんですね。それで要するに働いている人たちは時間がない、留学生の人たちはたくさん勉強できるからいいですね、って言いながら皆さんの顔を見たら、わかってないって雰囲気だったので、今度は皆に向けて「日本語をたくさん勉強してますね、今、勉強してますか」って言ったら、まだついてきてないようなので、ついに英語が出てしまったっていう感じですね。(J2)

日本人参加者同士では言語能力の差がない分、留学生参加者に対するようにはお互いの参加に気遣う必要がない。今回のように日本人参加者と留学生参加者が複数で参加している場面では、つい日本人参加者だけで会話を進行させ、留学生参加者が参加できるよう配慮することを忘れることがある。日本人参加者はそれを否定的に評価し、会話の内容を説明して留学生参加者の参加を促す調整を行っている。F2 は会話全体を把握したわけではないであろうが、英語での言い換えを理解し反応を返している。

(4) 情報提供による話題導入と話題転換

日本人参加者は留学生参加者に関することを質問する話題導入だけでなく、自分自身の体験を話すことによって情報を提供し話題を導入することもあった。次の例では日本人参加者が情報提供して導入したあと、日本人参加者と留学生参加者が相互に情報を提供して話題が展開している。

[話題 35 フランス居住]

J2: フランスにも私たちは住んでいました ←情報提供

J1: パリ

J2: パリ

J3: パリ

F1: I've been there once ←情報提供

J1・J2: あ、そうですか

F1: 子ども

J2: 子どもの時

J1: 子どもの頃

J2: 日本から行きましたか?

F1: Hong Kong

J2: 香港から ←情報提供

J3: あーいいですね

J1: むかーし、むかーし、まだ若い頃

J2: 一年間、一年間

J2 がフランスに住んでいたという情報を提供して話題を導入し、それに対して F1 が子供の頃フランスに行ったことがあるという情報を提供、さらに香港の話題になり、J1 が香港に住んでいたという情報を提供し、話題が展開している。この例では F1 が一部英語を使用しながらも自分の情報を伝えているため、J1 と J2 は質問や情報提供を続けられたが、もし留学生参加者から何の反応もなければ話題を転換せざるを得ない。次の例では F1 が日本文学が好きだという話題を受けて、J1 が図書館の話題を出しているのだが、思ったように話題が展開せず沈黙が続き、新しい話題が出ている。

[話題 32 図書館]

J1: 私も本を読むのが好きです、ここはとても便利です、そこに図書館があります ←情報提供

- F2: Ah, hah ←反応
J1: お隣が図書館です、とても便利です ←情報提供
(5 秒) ←反応なし
J3: 今お仕事のほうは ←話題転換
J1: リタイアしました

「そこに図書館があります」と言って指を指したんですけど、あんまりみんな「ああ、そうですか」って言うんで、「これ以上言ってもしょうがないな」と。(J1)

(5) 留学生参加者による情報提供に対する話題展開

留学生参加者も少ないながら情報提供によって話題を導入している。次の場面では F1 が趣味の日本文学の話題を導入し、しばらく日本人参加者との会話が続けている。

[話題 10 日本語学習の動機]

- F1: 日本、ぶながく? おもしろいので。 ←情報提供
J1: /日本文学
J2: だれ、だれがおもしろいですか? ←質問
F1: 谷崎潤一郎? ←回答
J1、J2: (笑い) 谷崎潤一郎、おーすばらしい
F1: おさむ、だざい ←情報提供
J1・J2・J3: あ、太宰治
F1: ああ、すみません、はるき・むらかみ ←情報提供
J1: はるき? りゅう?
J1: りゅう?
J3: はる、はるきだね
J1: はるき、そうですか
J2: 村上春樹は人気がありますね ←感想
F1: はい ←回答

J2: そう、すばらしい (拍手) 英語で読みましたか? もちろん ←質問

F1: はい、英語 (笑い) ←回答

J2: でも日本語をたくさん勉強して、日本語で読みます。

F1: /日本語を、はい、 Ah, むずかしい

多分彼が日本文学が好きだと言うので、私たちが喜んで、他のお二人のことを忘れて、ちょっと会話に深入りしちゃったなっていう感じが、ありますね。(J2)

J2 は F1 からの話題導入を肯定的に評価し、積極的に展開する調整行動を取っているが、同時に全員が会話に参加していないことを否定的に評価している。ここには他の留学生参加者が会話の内容を理解していない時には、理解を補助する配慮が必要であるという規範が感じられる。

5-2. 話題の選択

5-2-1. 選択された話題の内容

会話データに出現した話題は以下の手続きで単位を認定した。まず出現した話題を意味的なまとまりから話題として認定したものを「小話題」とし、さらに小話題の上位概念によって分類したものを「大話題」と認定した。大話題は初対面の会話と、家庭訪問の会話に分類し、それぞれ「初対面の話題」「訪問の話題」とした。初対面の話題の中には小話題から派生して内容が特化し、上位概念で括ることができないものがあり、これらを「関連した話題」とする。このような手続きによって分類したのが表6の話題リストである。

(1) 初対面の話題

初対面会話の話題に関して日本人参加者には事前に話題の例 (出身/日本での予定/趣味/専門/日本での生活に関する感想等) を紹介し、自然な流れで留学生参加者に話を振ってほしい旨依頼してあった。

今回の調査対象である家庭訪問のアクティビティーは、三牧 (1999) の

日本人参加者同士の初対面会話のような自然会話ではなく、日本人参加者と留学生参加者の接触場面であり、また予め話題例の提示をした半自然会話である。会話序盤は提示した話題例を中心に話題選択されているが、中盤からは日本人参加者が導入した話題が留学生参加者の情報提供によって内容を広げ、関連した話題が派生してきている。

(2) 訪問の話題

留学生参加者が事前に学習した訪問の会話はインターホンの会話から辞去の挨拶までを含み、日本人参加者には留学生参加者が学習した会話例を予め提示してあった。録音部分に含まれる項目は、「茶菓をいただく際の挨拶」「嫌いなものが出たときの表現」「辞去を告げる際の挨拶」「辞去の挨拶」である。実際の会話ではこれらの表現に加えて、食事に関する話題、辞去に関する話題、部屋の装飾品に関する話題などが選択されている。

5-2-2. 話題選択における言語管理

(1) 留学生参加者が会話に参加できる話題を選択する

初対面の話題を見るといづれも初級レベルで学ぶ話題であり、留学生参加者にとっては理解しやすく話しやすい話題である。これらの話題は日本に来てから何度か日本人と話した経験があると考えられ、急に聞かれて返答に困るようなことはないであろうし、他の留学生参加者にとっても理解しやすい内容だと推測できる。また訪問場面の話題も現在の場面に依存した内容であるため、ジェスチャーやレアリアの助けによりコミュニケーションが容易になる。日本人参加者は留学生参加者とスムーズにコミュニケーションできる話題を選択し、全員が会話に参加できるよう調整している。

日本人参加者のこういった話題選択には事前に紹介された話題例を参考にしている面もあると思われるが、日本人参加者が二人とも日本語教育に携わっていることも関係しているだろう。日本人参加者は留学生参加者とのコミュニケーションに支障が生じた時には、意味交渉や英語使用などの調整を用いて修復を図っており、接触場面での留学生参加者とのインター

日本語学習者の家庭訪問アクティビティーにおける日本人ホストの会話参加調整

表6 家庭訪問の話題リスト

	大話題	小話題
初対面の話題	家族	家族、父親の職業、姉の出生地
	居住地	サンフランシスコ、フランス居住、香港居住、日本での居住地
	言語	使用言語
	仕事	Jの仕事、Jの以前の仕事
	趣味	日本文学、絵画
	出身地	学生の出身地、学生の出生地、Jの出身地
	食事	日本の食べ物、学食、自炊、朝ご飯、寮の食事、ホームステイの食事、寿司、すき焼き
	専門	心理学、広告学
	滞在予定	来日時期、滞在予定
	通学	大学までの交通手段、電車のラッシュアワー
	日本	日本の印象、日本のテレビ番組
	日本語学習	日本語学習の動機、日本語学習歴、日本語学習の時間、クラス
	旅行	フィールドトリップ、京都旅行、大仏、奈良、鎌倉旅行
	寮	別科寮
	関連した話題	大地震、ワールドシリーズ、図書館、ESL、アラモの砦、スパニッシュ文化、江戸時代、鎖国、インターン、電車の広告、サンフランシスコの電車、略語
訪問の話題	食事	おしぼり、昼食、食事、マスタード、どら焼き、飲み物
	辞去	帰りの予定、訪問のお礼、辞去の挨拶
	装飾品	ちぎり絵、写真、絵皿、人形

アクションに慣れていることが推測できる。話題選択に留学生参加者の日本語の能力を考慮しているのも日本人参加者の接触場面経験に因るところが大きいと思われる。

(2) 関連した話題を出す

「関連した話題」は既に出た話題の内容に関連して、自分自身の情報を提供したり、相手の情報を引き出したりすることにより、さらに話題を発展させるものである。前出のフランス駐在の話題から関連するフランス滞在の話題を出し、さらに香港駐在の話題を出すという相互情報提供パターンでも、関連した話題によって会話が発展していた。この関連した話題によって話題は展開していくが、話題が特化して内容が難しくなり留学生参加者が話題についていけない危険性もはらんでいる。次の例では F2 が台湾からアメリカに移住した話を聞いて日本人参加者が ESL の話題を出しているが、話題が展開しなかったため次の話題に移っている。

[話題 39 ESL]

J1: 最初はじゃあ、ESL でした？

F2: はい、ESL

J1: アメリカは ESL があるからいいですね、ESL があるからいいですね、English as second language クラスがね、アメリカはたくさんあります、日本は外国人の子どもが来ても、教える場所がありません、日本語を教えるところがありません、ですから子どもは難しいです

J2: 大変です

J1、J2: (笑い)

(2 秒)

J2: 日本の朝の電車は大変でしょ？ ラッシュアワー

F2: はい (笑い)

私見てたんですけど、F2 さんはわかってましたね。経験してるから。

「そうそう」って顔をして聞いてましたね。でも他の二人はネイティブだから。(J2)

J1 は自身の子供がアメリカで ESL に通っていたという経験があり、F2 と話題を共有できるはずだと思ってこの話題を選択したが、意に反して F2 からの反応はなかった。F2 は ESL について話していることは理解しているが、話題が日本の ESL の状況に発展したところまでは理解し難く、発話できなかったものと推測できる。他の留学生参加者にとっては経験もなく、会話に加わることは困難だったことが推測される。話題が派生して発展していくことは、会話が深まり参加者同士が活発にインターアクションしていくために必要なことであるが、社会文化能力や言語能力の不足によって会話への参加が阻まれる要因にもなる。会話データの中盤で話題が発展し、留学生参加者が英語を使用し始める場面があるが、これについて J1 は話題が発展すると日本人参加者・留学生参加者双方にとって日本語で話すことに限界があることを示唆していた。

話題が弾むともっと話題をおもしろくとか、こういうことも展開させようとなると、日本語じゃどうしても彼らと同じで限界がありますよね。だからどうしても英語が媒介で、助けがないと話題が弾まないということがありますよね。(J1)

(3) 共有できる話題を選択する

話題の選択に関して日本人参加者は留学生参加者と共有できる話題を選択するという事前調整を行って、アメリカのスポーツの話題や F1 の出身地であるサンフランシスコの話題などを出していた。これは相手と共有できる話題を選択し、会話の展開を図る調整行動と言えるだろう。J1 がワールドシリーズを話題に出し、テレビ中継を見ていたら画面が揺れてサンフランシスコで地震があったことがわかったという話をした際、F1 と F2 が話題を理解していることをはっきりとあいづちで示し、話題を共有することに成功していた。

今回訪問した日本人参加者はアメリカでの駐在経験があり、留学生参加者の出身国であるアメリカの文化や地理などの事情に通じており、共有できる話題を選択することは容易だったと思われる。また留学生参加者の出身を知らされていたため、事前調整が可能であった。

6. 考察

6-1. 話題の導入・展開について

話題の導入に関しては、「質問－応答型」の話題展開パターンでは日本人参加者が質問をして留学生参加者が回答するケースのみが見られ、留学生参加者から日本人参加者への質問が出てこなかった。言語ホストが常にフロアをリードしている状況では、ターンを取って話題展開するタイミングを捉えるのは初級の学生には難解なことと言えるだろう。但し「情報提供話題展開型」では留学生参加者も日本人参加者が導入した話題に関連して話題を出しており、終始受け身でいたわけではない。新しい話題を質問形式で導入するよりも、それまでの話題を継続させ情報を追加するほうがターンを取りやすいものと考えられる。

話題の展開に関しては、日本人参加者が話題導入する際、留学生参加者の日本語力や反応の仕方によって展開の有無が調整されていた。「質問－応答型」では留学生参加者の回答から展開していく内容が、回答した留学生参加者の理解産出の範囲であれば話題を展開しているが、理解産出を超えた内容になりそうな場合、日本人参加者は話題を展開するのを回避している。「情報提供話題展開型」では、日本人参加者の情報提供に対して留学生参加者があいづちや感想などの反応を示せば話題を展開するが、何も反応がない場合には他の話題に移っている。これらの調整には「会話を円滑に維持するべきである」という規範が働いているものと思われる。

また日本人参加者は「全員が会話に参加すべきである」という規範の下に、参加者への話題の振り分けや展開の調整をしていた。言語ゲストである留学生参加者に平等に発話の機会を与えるために発話の少ないF3に話題を振り、日本人参加者同士で話す際には内容を英語に直して留学生参加

日本語学習者の家庭訪問アクティビティーにおける日本人ホストの会話参加調整者に伝え、できる限り全員が進行中の会話の内容を理解し、会話に参加できるよう配慮していた。

6-2. 話題の選択について

「初対面の話題」には三牧（1999）の大学生の日本人参加者同士による初対面話題には見られない話題（言語、滞在予定、日本、日本語学習、旅行など）が出現した。これらも含めて今回の初対面の話題リストで接触場面の話題、「接触話題」の例が明らかになった。

これら初対面の話題は会話序盤から中盤にかけてお互いの情報を交換して共通点や興味を見出し話題を発展させる目的で選択されており、中盤から終盤にかけては既出の話題から派生した「関連した話題」が出現してくる。話題が展開して関連した話題が出てくると、留学生参加者の語彙や社会文化知識の不足から理解産出が追いつかずコミュニケーションに支障が生じる場合があり、日本人参加者は「留学生参加者が会話に参加できる話題を選択する」調整を行っていた。また留学生参加者の文化に言及する等「共有できる話題を選択する」という調整を行うことにより話題の展開を図っていた。これらの調整行動にも「全員が会話に参加すべきである」という規範が働いているものと思われる。

関連した話題が頻出し留学生参加者の日本語力を超えた範囲になると、留学生参加者は一部英語で話し始めるようになるが、日本人参加者は「理解するためには英語使用も必要である」という規範から、特に留学生参加者の英語使用を回避するような調整は行っていない。留学生参加者の日本語力の限界と話題展開の維持のバランスを取るために必要な行動であり、もし英語を全く使用しなければ話題が続かずに会話を維持できなくなるだろうと日本人参加者はコメントしている。ここにも「会話を円滑に維持すべきである」という規範が働いていると思われる。

まとめと今後の課題

今回は話題が滞った場合には転換を図る調整が見られた。数名の留学生参加者が参加する会話の場面では、1人に対して長時間話題を続けたり、

沈黙を待って話題を続けたりすることは、他の留学生参加者の参加の機会を奪うことになり、日本人参加者の調整の方法は実際使用場面では自然な流れであると思われる。しかし話題が続かなければせっかくのインターアクションの機会を有効に活かさないことになり、実際使用のアクティビティーに参加した意味が半減してしまうことにもなりかねない。留学生参加者がスムーズに会話に参加できるよう、話題の導入の仕方や関連話題の出し方、家庭訪問の話題リストを使っの会話練習などをプログラムに組み入れていくことが必要であろう。また今回は日本人参加者の視点のみを分析に入れたが、次回は会話時の留学生参加者の意識も調査し、双方の意識の食い違いを分析に加えたい。

参考文献

- ザトラウスキー、P. (1993) 『日本語の談話の構造分析——勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版。
- 中井陽子 (2002) 「初対面母語話者／非母語話者による日本語会話の話題開始部で用いられる疑問表現と会話の理解・印象の関係——フォローアップ・インタビューをもとに」『群馬大学留学生センター論集』2号、23-37頁。
- ・大場美和子・土井真美 (2004) 「談話レベルでの会話教育における指導項目の提案——談話・会話分析的アプローチの観点から見た談話技能の項目」『世界の日本語教育』14号、75-91頁。
- ネウストプニー、J. V. (1995) 「日本語教育と言語管理」『阪大日本語研究』7号、67-82頁。
- (1997) 「プロセスとしての習得の研究」『阪大日本語研究』9号、1-15頁。
- ・宮崎里司 編 (2002) 『言語研究の方法』くろしお出版。
- ファン、S. K. (1998) 「接触場面における言語管理」『日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成』研究会資料。
- (2006) 「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」国立国語研究所編『日本語教育の新たな文脈』(120-141頁)アルク。
- 三牧陽子 (1999) 「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー——大学生会話の分析」『日本語教育』103号、49-58頁。
- Fan, S. K. (1994). Contact situation and language management. *Multilingua*, 13 (3), 237-252.
- (2009). Host management of Japanese among young native users in contact

日本語学習者の家庭訪問アクティビティーにおける日本人ホストの会話参加調整
situations. In J. Nekvapil & T. Sherman (Eds.), *Language Management in Contact
Situations: Perspectives from Three Continents*. Frankfurt: Peter Lang.

付録 会話データの文字化表記

話題 26 昼食	話題の出現順番号と話題の内容
、	話者がターンを持続している間の 1 秒未満のポーズ
。	1 秒未満のポーズおよび下降イントネーション
?	上昇イントネーション
(3 秒)	1 秒以上のポーズの秒数
ー	長音
()	笑い、拍手等の非言語行動
/	同時発話